

学位請求論文審査の要旨

報告番号 乙 第 号

氏名 鈴木 智之君

論文題目 文学雑誌『ワロニー』における地域主義的企図の生成と展開
——文学制度・風景表象・社会言語的状况——

審査担当者

主査	慶應義塾大学文学部教授・社会学研究科委員 文学修士	浜 日出夫
副査	慶應義塾大学法学部教授・社会学研究科委員 博士（社会学）	澤井 敦
副査	お茶の水女子大学名誉教授 社会学修士	宮島 喬
学識確認	慶應義塾大学法学部教授・社会学研究科委員 博士（社会学）	有末 賢

I 本論文の構成

本論文は、多言語国家ベルギーのフランス語圏ワロン地方のリエージュにおいて 1880 年代から 90 年代にかけて刊行された文学雑誌『ワロニー（*La Wallonie*）』（1886-1892）を対象として、主としてここに見られる「地域主義」的企図の生成と展開を、一方ではベルギーにおける国民的ないし地域的同一性の構築過程に、他方では文学場におけるこの雑誌の位置の取得過程に関連づけながら、記述・分析しようとするものである。

本論文の構成は以下のとおりである。

序章 課題の設定

1. 歴史的状況と分析の焦点
2. 文学場の境界
3. 文学場の歴史的状況
4. 多層的な文脈の中の文学的企図
5. 各章の構成

第1部 『ワロニー』における象徴主義と地域主義

第1章 企図の形成

1. 制度としての雑誌、企図としての雑誌
2. 『ワロニー』（1886 - 1892）
3. 企図の形成
4. 企図の多義性、文脈の多元性

第2章 象徴主義への道

1. 1886 年——象徴主義の浮上
2. 象徴主義への接近
3. 台頭の戦略

第3章 アルベール・モッケル —— ワロンの象徴主義者

1. 軌跡

2. 「産業的」なものからの逃走
3. 場の構造と経済的・文化的資本
4. フランス文学の場における「ベルギー人」
5. 「精神性」と「音楽性」
6. モッケルとワロンのなもの
7. 地域的固有性の空洞化

第4章 地域主義の後退と持続

1. 起点
2. 地域を語るテキスト
3. 『若きベルギー』との競合の中で
4. モッケル、シェネー、ダンブロン
5. 「可能性の空間」の中で

第2部 風景的同一性の構成

第5章 風景と同一性

1. 風景の近代性
2. 同一性の雛形としての風景
3. ナショナル／レジョナルな同一性——風景表象の賭け金としての
4. ベルギー＝フランドルの風景
5. 対照項としての「フランドル」——ワロンの風景へ

第6章 ワロンの風景

1. 地域的同一性の形象としての風景
2. 風景を語るテキスト
3. 「風景」の構成要素
4. 風景の選択的構成と対照効果
5. 風景を構成するまなざし
6. 精神としての物——風景の象徴主義
7. 受け継がれていく幻想の雛形

第7章 モッケルとドネー——ワロンの風景／魂をめぐる詩と絵画の交感

1. 詩と絵画の相互作用
2. オーギュスト・ドネー
3. パリの芸術場と地方の画家
4. モッケルとの出会い
5. 「解釈者としての芸術家」
6. 線と形
7. 物と光
8. 「ワロンの風景」
9. 「ワロンの画家」としてのドネー
10. 物、光、魂——ドネーからモッケルへ
11. ワロンの文学とその絵画性

第3部 社会言語的状況の中の『ワロニー』

第8章 ベルギー文学の「定数」としての言語的インセキュリティ

1. 言語場——発話行為と言語的正統性
2. 言語的インセキュリティ
3. 言語市場と言語的ハビトゥス
4. ベルギーにおけるフランス語使用と言語的インセキュリティ
5. 純粋主義と文体過剰

6. ダンブロンとモッケル——『フロニー』における言語戦略の二つの形
7. 言語戦略とその条件

第9章 フロン語文学とフランス語文学

1. フロン同一性と言語
2. フロン語とは何か？
3. フロン語文学運動の歴史
4. 『フロニー』におけるフロン語文学関連記事
5. 『フロニー』にとってのフロン語文学
6. 「マイナー文学」としてのフロンのフランス語文学？
7. フランス語の象徴的支配と地域の文学のゆくえ

終章 幻のフロニー

1. 『フロニー』における地域主義的企図の生成と展開——二重の文脈の中で
2. 「幻想」の雛形の生成
3. フロン同一性の言説的構築とその限界？
4. 「文学」の社会的諸文脈

II 本論文の概要

序章では、雑誌『フロニー』の成立をうながし、かつ規定した社会的状況を確認し、その社会的条件との関わりにおいて「文学実践」を記述・分析するための方法論的視角が提示される。

第1部『『フロニー』における象徴主義と地域主義』は、この雑誌全体が、どのような理念や目的を掲げて創刊され、その後の歴史の中でこれがどのように変質していったのかをたどる。その際、記述の軸をなすのは、「象徴主義」という美学的立場の鮮明化がいかなる「場」の構造の中で生じたのか、またこれとの相関において「地域主義」というもうひとつの機軸が雑誌全体の中でどのように位置づけられていったのか、の2点である。

第1章は、『フロニー』がその前身である『エラン』および『エラン・リテレール』から、どのような経緯を経て創刊にいたったのかを跡づける。その際、雑誌の基本的な性格がどのように定義され、いかなる文学実践のプログラムが掲げられたのか、またそれは、ベルギー社会の歴史的状況と、フランス語文学の場の構造に対してどのような「位置の取得」をはかるものであったのかを検討される。

第2章は、『フロニー』が「象徴主義文学」の拠点としての性格を強め、これによってフランス文学の場の中に独自の位置を占めていく過程（台頭の軌跡）をたどる。その動きは、美学的・理論的立場の鮮明化としてだけでなく、文学場を構成する他の主体との競合関係の中で「位置を取る」ための戦略の帰結として理解される。

第3章では、前章において見た「象徴主義」への道のりを、この雑誌の主導者である象徴派詩人アルベール・モッケル個人の「軌跡」としてとらえ返すことが試みられる。モッケルは、経済資本・社会資本・文化資本に恵まれた「遺産相続者」（ブルデュー）であり、たぐいまれな戦略的センスをもって自己の文学的立場を決定し、雑誌『フロニー』の正統性を高めていく。しかし、彼自身が「フロン運動」に生涯コミットしていたにもかかわらず、その文学的台頭の戦略は、彼自身の作品から「地域主義的」色彩を消し去っていく方向に進んでいったことが示される。

第4章は、『フロニー』が「象徴派」の雑誌としての性格を強めていく中で、当初掲げられていた「地域主義的企図」がどのように変質していったのかをたどる。雑誌内部での、人間関係の対立に媒介されながら、「フロンの文学を立ち上げる」という意図は雑誌の終刊にいたるまで、周辺化されつつも持続していったことが確認される。

第1部を通じて明らかとなったのは、以下の4点である。

(1) フランス(語)文学圏の周縁(ベルギー／リエージュ)に拠点をおいて、文学場への台頭をはかろうとするワロンの若者たちが、先行する他誌との競合の中で正統性の承認を追求していく上で、象徴主義と地域主義が、戦略的に取得可能な二つの立場として浮上してきたこと。

(2) その両者のあいだでの重心のバランスは、偶発的な出来事(あるフランスの雑誌の破産とその吸収)に左右されながらも、この時代のフランス(語)文学の「場の構造」と、雑誌の中心的な担い手たち、特にその主導者(A. モッケル)の保有する諸「資本」との関連によって条件づけられていたこと。

(3) その中で、『ワロニー』はしだいに地域主義的色彩を弱め、フランスとベルギーの象徴主義者が集結する場所という性格を強めていったこと。

(4) この戦略的展開は『ワロニー』のオリジナルメンバーのあいだに緊張関係をもたらすものの、「地域の文学」を確立し主張していこうとする企ては完全に潰えてしまうわけではなく、雑誌の中で周辺化されながらも継続していったこと。

以上4点である。

第2部「風景的同一性の構成」では、制度論的分析から表象論的分析へと力点を移し、『ワロニー』に掲載された地域主義的作品の中から、ワロン地方の風景の描写を抽出し、その描出の反復の中でどのような地域空間の像が構成されていったのかが検討される。

第5章では、「風景表象」に関する既存の研究が概観され、地域や民族の同一性の感覚と「風景の同一性」の感覚がいかに結びついているのかが論じられる。これをもとに、ベルギーの歴史家A. ピロットが提示した「風景的同一性」という概念が本論文の文脈に即して再定義される。その上で、19世紀末のフランスおよびその周辺地域において、「風景表象」または「風景を語る言説」がどのように配置され、「ワロンの風景」がどのような間テクスト性の中に置かれていたのかが検討される。

第6章では、前章の考察を踏まえ、「風景を構成する要素」と、これを一貫性をもった「表象」にまとめ上げる「まなざし」の意味作用に着目しつつ、『ワロニー』に掲載された文学作品の検討がなされる。

第7章では、この文学作品の中の「風景」を、同時代の画家A. ドネーの絵画作品における「風景」と対照し、相互の連動過程に関する考察がなされる。それは単に「表象」相互の同時代的相同性を抽出するだけではなく、「文学者」「画家」双方の置かれている「制度的文脈」の規定力を明らかにする試みでもある。

第2部を通じて明らかとなったのは、以下の5点である。

(1) 「ワロン地方」および「ワロン人」の姿を語ろうとする作家・詩人たちの試みは、その作品ごとには固有の意味世界を構築しながらも、横断的にこれを展望してみると、類型的な同一性をもった「ワロンの(原)風景」を共同構築する作業となっていたこと。

(2) 彼らの描き出した「ワロンの原風景」は、その要素としては①川の流れ(ムーズ川)、②丘あるいは谷(傾斜地)、③森あるいは樹木、④青空と陽光、⑤農民、⑥(神話的または象徴的な)女によって構成される。それは必ずしも目に映るワロン地方の姿を偏りなく写し取ったものではなく、「選択的」な配置の上に成立するものである。一方においては、すでに現実のものとしてあったはずの「産業的」なもの(炭鉱や製鉄工場)が系統的に排除され、他方では、「フランドルの風景」との差別化の論理において、「起伏に富み」、「青空が広がり」、「豊かな森」の広がる大地というイメージが選択されていること。

(3) さまざまな要素は、特定の偏りを帯びた「まなざし」のもとに、ひとまとまりの意味世界として構成される。「ワロンの風景」を構成するまなざしには、①民俗学的まなざし(今日の前に現前する世界を、過去の残像としてとらえる)、②観光のまなざし(現在の風景的世界を、

来訪したよそ者の視点からとらえる)、③芸術のまなざし(先行する芸術作品の枠組みを介して、目前の風景を切り取っていく)という三つの特徴を確認することができること。

(4) こうしたまなざしの働きを介して、「風景」は、そこに「民族の精神」あるいは「魂」を宿す場として見いだされていく。そして、見えるものの背後に「見えないもの」を幻視する力をもつ者として「ワロンの芸術家」の自己規定がなされていく。「ワロンの風景」は、汎神論的または神秘主義的な心性を宿した「ワロン人」のまなざしの前に、その「魂」を体現する「象徴」としての価値を付与されていくこと。

(5) 『ワロニー』において構築されていった「ワロンの風景」は、周辺の視覚芸術家(画家)たちの作品との相互作用等を通じて、その後の時代に継承される「幻想」の雛形を準備することになること。

以上5点である。

第3部「社会言語的状況の中の『ワロニー』」では、この雑誌における文学実践が、ベルギー・ワロン地方のフランス語使用者たちをとりまく「社会言語的状況」との関わりにおいて検討される。

第8章は、フランス語圏の「周辺」における「フランス語使用」の条件を「言語的インセキュリティ」という概念によってとらえ、ベルギー・リエージュを拠点とした文学実践の文脈を「言語場」の構造の中に位置づけて考察する。

第9章では、『ワロニー』の寄稿者たちが「ワロン語文学」に向けたまなざしをたどりながら、地域の言語との関わりの中で、「フランス語で書くこと」の意味を検討する。

この2章を通じて、フランス語使用圏の地理的周辺という条件のもとに生まれる「言語場」の力学が、彼らの「文学」を方向づける基本的な規定要因となっていたことが確認される。

終章では、以上の考察の要約と、残されている課題の確認がなされる。

III 本論文の評価

本論文は、著者が慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程在学中にベルギー政府給費留学生としてリエージュ大学に留学して以来、25年以上に亘って取り組んできた研究の集大成であり、400字詰原稿用紙に換算して約1400枚という大作である。

本論文の対象は、文学史上著名な作家でも、定評ある文学雑誌でもなく、小国ベルギーの19世紀末のわずか7年間(1886-1892)存続したにすぎない、地域名を冠した文学雑誌『ワロニー』およびそこに掲載された作品である。このことは、本論文が、文学作品の内在的価値に重きを置く文学研究ではなく、作者と作品の社会学的理解をいかに進めるかという方法意識にみちびかれた文学社会学的研究であることを示している。

本論文はこのために、文学生産を階級的地位や特定イデオロギーに還元するのではなく、その生産の場の自律性を重視するピエール・ブルデューの文学場の理論、ジャック・デュボアの文学制度理論を方法論として採用する。すなわち所与の場において機能している正統化の審級、そこにおける行為者(文学者)の文化資本の状態、行為者たちのとりうる戦略、さらに出版の諸条件などに基づき、個々の文学生産や雑誌の活動を明らかにしようとする。それだけでなく、文学実践に影響するワロン地域の歴史状況や文化的状況もフォローされていて、その柔軟な社会学的アプローチは高く評価される。

リエージュ大学中央図書館やリエージュ市立図書館に所蔵されている原資料に基づく論証はたいへん緻密であり、わが国のみならず世界的にも類を見ないものである。数十編に及ぶ作品のテキストの紹介も丹念になされ、必要に応じフランス語との対訳も示され、日本語訳も適切で、著者の高度なフランス語能力が証されている。

本論文は文学社会学における達成として高く評価しうるものである。以下4点にわたり、本論文の成果を挙げておく。

(1) ベルギーという文学場は完結したものではなく、その評価の最終審級はしばしばパリの文学界にある。雑誌『ワロニー』はリーダーのモッケルの戦略により象徴主義を主調とする作品の雑誌となり、当時マラルメ、ヴェルレーヌらの象徴主義が支配したパリの文壇から評価された。以上の確認は、著者によるベルギーの文学場の社会学的な解明の成果であり、一地域雑誌が文学的成功を収めうる基本的諸条件を明らかにしている。

(2) 本論文は、『ワロニー』誌の地域主義的企図の解明をも目指しているが、同誌が意識し表現するワロニー地域は、明るい陽射し、ムーズ川の流れとなだらかな丘、やさしい乙女たちによって象徴され、(暗い重いフランドルとの対比で) 静謐、明るさ、やさしさをイメージさせるものである。しかし、ワロニー地域を実際に特徴づける工業化の現実(黒煙を吐く工場、炭鉱、ボタ山、労働者など)は排除されており、このことは、同誌の標榜する地域主義が、同誌の寄稿メンバー中の労働者出身者(ダンブロンなど)を疎外したものであることを示している。この点に象徴派でブルジョア出身のモッケルらの戦略の一面性、矛盾が見られることを的確に指摘している。

(3) 以上とも関連するが、文学にとって「風景」のもつ意味が多面的に、社会学的に追究されている点に本論文の貢献の一つがある。実風景ではなく作品に描かれる「表現的風景」が問題とされるが、そこには個性志向/共同性志向、ナショナル/リージョナルなどの二元性が見いだされ、それらからの選択、組み合わせにより風景構図が組み立てられる。ワロン・アイデンティティを強化するため、ワロンの「風景アイデンティティ」が形づくられ、絵画的なもの(画家の描く挿し絵)も動員し、他と対抗し、競っているさまが、豊富な例示とともに分析されている。文学作品における風景描写が一種のアイデンティティ戦略に沿う構築性をもつことを明らかにしている。

(4) フランドル出身者も含め、ほとんどすべてのベルギー作家はフランス語を表現言語として使用するため、固有の問題を負っており、著者はこれをラボフの「言語的インセキュリティ」概念を援用して多面的に分析している。上層階級出身で幼児から洗練されたフランス語の環境に身を置いてきたモッケルのような『ワロニー』誌同人は「純粹主義」を採用するが、民衆出身のダンブルンのような同人のなかにはフランス語表現に無意識の不安を抱え、「文体過剰」に陥り、自然の達意の表現を損なっている者もいる。この言語矯正の例として、著者はいくつかのフランス語テキストを提示し、きわめて説得的に論証している。これら同人にとっては母語だったと思われるワロン語とその19世紀における状況も的確に説明されている。この「言語的インセキュリティ」による言語表現の躊躇、萎縮、過剰化などの著者の指摘は、さまざまなマイノリティ文学やポストコロニアル文学の出会っている問題にも共通するものである。

しかし本論文には課題もまた残されている。以下2点を指摘しておく。

(1) 本論文では必ずしも整理され位置づけられていないものに、ワロニー、フランドル、パリ(フランス)のトライアングルをなす文学評価の審級関係がある。パリ文学界は、親和性のある象徴主義の雑誌『ワロニー』を評価する一方、メーテルリンク、ローデンバック、ヴェラレーンなど、フランドル系作家にも活躍の場を与え、関心を示した。フラマン的な、「北方的精神」を体現する風物、および物のなかに精神的なるものを見出す「幻視」の力に異質の魅力を感じていたと思われる。とすれば、ベルギーとフランスを繋ぐ文学場においては、文学の正統性の審級は必ずしも一元化されていず、非フランス的な北方精神の浸透した象徴主義にも価値づけを行う二元性をもっていたのではないか。このことは本論文でもっと明示化し、考察を深めてよかったと思われる点である。

(6) 本論文は『ワロニー』という歴史的にも地理的にも限定されたローカルな文学雑誌を

事例とする文学社会学的研究であるが、そこから得られた知見は他のマイノリティ文学についても妥当することが予想される。本論文において、著者は比較分析について禁欲的であり、きわめて慎重に沖縄文学、ケベック文学に言及しているにとどまっているが、比較分析を通じてこのような類似した文学実践のなかにワロン地方の文学実践を位置づけていくことが、『ワロニー』に現れた文学実践の特殊性・独自性をより鮮明に捉えるために今後必要と思われる。

IV 審査結果

このようにいくつかの課題は残されているものの、審査委員一同は本論文が博士（社会学）を授与するにふさわしい水準に十分到達しているものと判断する。